

# 令和4年度授業改善推進プラン（調査結果分析シート）

西東京市立碧山小学校

## ●全国学力学習状況調査（小学校第6学年・中学校第3学年）

	課題が見られた問題の概要	正答率	調査結果を踏まえた成果	調査結果を踏まえた課題
国語	3三ウ 漢字の書き取り(したしむ)	67	●互いの立場や意図を明確にしながらか話し合い、自分の考えをまとめる趣旨の問題では、正答率は他の問題より低いものの、全国の正答率と比較すると15ポイントも高くなっている。なんでも話せるような学級経営を基盤に、日頃から意見を交流し、自分の考えを書いたり、発表したりする学習を積み重ねてきた成果である。	●全体的には正答率が全国に比べてほぼ高い結果が出ているものの漢字を使って書き直す問題の(したしむ)は全国の正答率を下回った。(ろくが)(はんせい)を含めた書き取りも7割前後の結果となっている。既習の漢字を使う機会を増やすためにベーシックドリル等を活用したり、家庭学習として復習する機会を計画的に取り組んでいく必要がある。 ●【伝え合いの様子の一部】を基に【文章2】のよきを書くことの正答率が37.4と極端に低かった。全国と比較しても0.3ポイント低い結果となった。自分の考えを書くだけでなく、文章の構成や展開を明確にした文章を書く練習が必要である。文章の構成がはっきりしている新聞づくりなどの活動を取り入れ、文章の趣旨が読み手に伝わるようにな取組をしていく必要がある。
	3三イ 漢字の書き取り(はんせい)	67		
	3二 【伝え合いの様子の一部】を基に【文章2】のよきを書く	37.4		
	1四「ゴミ拾い」か「花植え」かのどちらかを選んで□でどのように話すかを書く	62.6		
算数・数学	14と21の最小公倍数を求める	69.2	●全国の正答率を下回るものは2つの問題で差も3ポイント以内である。乗法の計算や図形の性質や書き方の基本的な知識・技能は習得している児童が多い。ベーシックドリルなどのドリルで反復練習を積み重ねている成果であると考えられる。また、図形の学習ではICTを活用し、児童が視覚的に理解しやすいような指導方法の工夫や改善の努力が生きている。	●最小公倍数を求める問の正答率が全国の正答率より3ポイント下回っている。最小公倍数という言葉の意味を理解していなかったり、忘れてしまったりしている児童への手だてを確実に行う必要がある。約数・倍数の意味や求め方について改めて復習し、定着を図る。 ●割合を用いて比較量を求める問題の正答率が全国に比べ2ポイント低い結果となった。単に計算式を暗記するのではなく、基準量・比較量・割合のそれぞれについて意味の理解する必要がある。図や数直線などを適宜用いて答えを導き出すことができるようにしたい。割合の指導では今まで以上にICTを活用し、視覚的に理解できるように改善していく。また、日常生活の場面に即して解答できるように指導したい。 ●正答率が一番低かったのが、「果汁が含まれている飲み物の量を半分にしたときの果汁の割合について正しいものを選ぶ」問題である。全体の1/4しか正解できていない。正答率が低い原因の一つが問題文を丁寧に読み込んでいないケアレスミスが考えられる。飲み物の量を半分にしたときの果汁の割合を果汁の量と思い込んでいる児童もいる。落ち着いて分かっていること、求めることを確実に押さえる学習方法を定着させたい。 ●「85×21の答えが1470より必ず大きくなることを判断するための数の処理の仕方を選ぶ」の問題では、全国の正答率よりも12ポイント高い結果が出ているが、半数より多くの児童が誤答している。示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を考察できるようにするためには85円も21個も低く見積もって計算する必要があることを理解しておく必要がある。日常生活の中での経験を積み重ねること、問われていることの意味を考え、判断する力を身につけさせたい。
	果汁が40%含まれている飲み物の量が1000mlのときの果汁の量を書く	62.6		
	85×21の答えが1470より必ず大きくなることを判断するための数の処理の仕方を選ぶ	47.3		
	果汁が含まれている飲み物の量を半分にしたときの果汁の割合について正しいものを選ぶ	25.3		
理科	昆虫の体のつくりの特徴を基にナナホシテントウが昆虫であるかどうか説明するための視点を選ぶ	72.5	●碧山森が近くにあり、低学年からそこを活用した学習をする機会を設けている。児童はそこに暮らす生き物や植物、自然環境への興味や関心は高い。そのため、今回の調査においても全国の正答率をほぼ上回る結果となっている。 ●理科専科による専門的な指導により実験や観察への興味関心が高く、知識・技能の習得だけでなく、仮設・検証・考察・結論という筋道をたてて考えることが身につけている。	●「昆虫の体のつくりの特徴を基にナナホシテントウが昆虫であるかどうか説明するための視点を選ぶ」問題で、全国の正答率を0.6ポイント下回った。児童は恵まれた自然環境の中で生活し、昆虫に触れる機会も多いはずであるが、結果に結びついていない。昆虫の体のつくりの理解と身近にいる昆虫を関連付けて理解することができていない。教科書だけでなく、複数の昆虫を観察し、昆虫の特徴を理解し、普遍化させて思考し、判断する学習を増やしていく。 ●「一定量の液体の体積をはかり取る器具の名称を書く。」問題では、正答率が57.1%であった。全国の正答率と比較すると10ポイント以上低い。メスシリンダーは4年生で扱う器具であるが、その後の活用がほとんどない。そのため、名称を忘れてしまった児童が多い。(2)の設問で問われている使い方については考えて判断することで回答できるように正答率も全国より高い結果となっている。名称を覚えるために理科室内に主な器具と名称がわかる掲示物を貼るなど環境を整えることも必要であると考えられる。
	一定量の液体の体積をはかり取る器具の名称を書く。	57.1		